資料５

第４回需給小委員会における委員の発言の概要

１　需要見通し関係

①　見通しについて

・　生産者の高齢化や離農等を背景として栽培面積・生産量の減少が進んでおり、更に近年の価格低迷による農家経営への影響等もあり、今後とも厳しい状況が見込まれている。消費拡大、低コスト化を強化しない限り、生産の維持・向上は望めないのではないか。（浅沼委員）

・　消費者としてみると「国産果実は高い」との意識があり、今後の果実の需要を考えると、国産果実が減少し、輸入果実が増加していくのではないか。（三原委員）

・　消費者の購入理由として、品種や品質、簡便化志向等が基本にあり、必ずしも「果実は高いから購入しない（安いから購入する）」との意識は低いのではないか。また、好んで国産果実よりも輸入果実を購入しているわけではないのではないか。
　また、外国産果実と差別化等のために国産果実の成分、機能性の点を積極的にＰＲすべきではないか。（内藤委員）

・　輸入加工品の伸びが大きいのは、食べやすさや保存のしやすさなどが影響しているのではないか。また、需要動向に関し、価格を重視するのか、品質を重視するのか、品目ごとに検討することも必要ではないか。（川端委員）

・　価格と購入量の相関関係を見ると、さくらんぼのように短期間に出荷されているものと違い、みかんやりんごのように長期的に出荷され、量的に飽和している品目は、価格が低下したから購入量が増加するという傾向にはならないので、自給率を検討していく上で、品目ごとに消費の傾向などを検討していくことが必要ではないか。（梶川委員）

②　推計手法について

・　現行の推計方法でみかんの価格を推計しているが、かい離が大きい。現行の推計手法で需要推計をするとなると、低価格で推計せざるを得ないことになり、産地の方がついて行けないことになるので、問題。トレンドで推計する場合は、施策効果を議論し数字を取りまとめるべきではないか。（浅沼委員）

・　トレンドで推計する場合は、期間を長くとる等データ量を多くし、いろいろな形で推計して将来望ましい形の推計量が出るように分析することが必要ではないか。（梶川委員）

・　過去からのトレンドで推計する場合、国内生産は縮小する方向となってしまうが、生産者・流通関係者・消費者の努力によって変わるはずであり、そのための消費拡大、生産・流通面での低コスト化等の施策効果を反映させることが必要ではないか。（江郷委員）

２　関係者ヒアリング

①　量販店

・　コンテナによる輸送費の軽減ということについて、現実の問題として空き容器を生産者に戻すコストがかかる。また、段ボールの印刷を産地がやたらにカラフルに印刷したりしているが、安い段ボールに必要最小限の印刷で良いのではないか。（林委員）

・　温度管理は、お店では確かに実施されているが、消費者の温度管理よってかなり食味などが変わるので、消費者への品質管理の情報提供も必要ではないか。（内藤委員）

②　みかん果汁工場

・　消費者は国産果汁の表示を望んでいるのではないか。（内藤委員）

③　産地

・　宅配等産地直送の場合、それを集める人、値段を設定する人、お金を払う人のコストがかかる。市場や仲卸を通っても効率的に機能している場合は中間手数料と変わらないのではないか。（林委員）

・　産地直送の場合、宅配料金について、一定期間なり一定数量で契約を結ぶことによって、一般のものよりは割安にしていただいているようだがみかん、りんご、かき等は１０ｋｇ箱で運賃比較をすると高くなる。さくらんぼとか高級ぶどうであれば良いが、販売価格の安いものについては流通コストが割高になってしまうというのが現状ではないか。（浅沼委員）